



part 1 右頁／遼陽眞子様組で文通していたハリウッド女優が、実の母ではないと知ったショックから始まった自撮りシリーズは、崩壊したアイデンティティを取り戻すための手段なのか。
●トマシュー・マフチニスキ《無題》 2009～18年
デジタル写真、デジタルファイルからのインクジェット・プリント
38cm×可変サイズ トマシュー・マフチニスキ財団蔵
左頁／長さ6.5メートルに及ぶ大画面は、いっけん巨大な楽譜のよう。
実は作家の母親への熱い思いや
日常生活の報告がドイツ語で綴られている。
●ハラルト・シュトファース《無題》 2010年 インク、紙
650×150cm abcdコレクション/ブリュノ・ドゥシャルム蔵



Sep. 2021 Geijutsu Shincho

ART
exhibition

exhibition
ポコラート世界展
「偶然と、必然と、」
7月16日～9月5日
東京・アーツ千代田 3331
1階メインギャラリー

『創造力で人生のハードルを飛び越える』 はみだし系 情熱アート大集合!

かねて「アーツ千代田 3331」が取り組んできた「ポコラート」事業の10周年を記念する大規模展。障害や美術教育の有無にかかわらず、無心に創作に取り組む人たちの、熱き作品群が世界22ヶ国から集まつた。

撮影：筒口直弘（本誌、115頁上以外すべて）



上／驚異的な計算能力と記憶力を有するワイドナーは「世の中は全て日付の法則で成り立っている」と考え、それらを画面に起こしている。本作は未来の日付が何曜日にあたるか記した一種のカレンダー。●ジョージ・ワイドナー『メガロポリス』2000～10年 紙ナップキン 60.5×98cm abcdコレクション/ブリュノ・ドゥシャルム蔵
下／社会問題を擬人化したインドネシア人作家の作品。脇に立つ本展キュレーターの嘉納さんは芸術人類学が専門で、フランス国立社会科学高等研究院(ほかに所属)。●エンタン・ウイハルソ『故郷(ふるさと)の追憶』2018年 アルミニウム、自動車用塗料 244.5×339×15cm ミヅマギャラリー蔵

という意図が込められている。これまで公募展を中心に活動してきたが、10周年を記念した今回は企画展として、欧米・アジアからアフリカに至る世界各国の作家50名による約240点を集めた(コロナ禍で1年遅れての開催)。およそ2年にわたるリサーチの成果だ。キユーレーションを担当した嘉納礼奈さん「下の写真右」は「作者である“わたし”という小宇宙が、大宇宙へと広がっていくプロセスを表したかった」と語る。「フランスなら『アール・プリュイット』(画家ジャン・デュビュッフェが提倡した、美術教育を受けていないひとたちによる「ありのまま」表現)、英米なら『アウトサイダー・アート』(心身に何らかの障害を抱えた作家による創作)といった概念がありますが、そうした枠組みに縛られることなく、創作物をよ

exhibition art NEWS

ボ
慣れない、ちょっとお茶目な響きが気になるが、実はこれ、造語である。「Place of "Core+Relation Art"」の略で、アートスペース「アーツ千代田3331」と千代田区が主催する事業の名称なのだ。障害や美術教育経験の有無などの垣根を取り払つて、作品の評価とインスピレーションの場を作ろう



左上／使用済みの割り箸を箱に入れる作業に熱中し、ひたすら押し続ける出来上がった作品。「押す」行為は約2ヶ月にわたったが、その後は興味を失ってしまったという。左上に見るのはフランスのアンドレ・ロビヤールがパイプ管や電気コードなどの廃品で作った銃。●武田拓《はし》2010年 割り箸 230×80×100cm(右)
159×100×170cm(奥手前) 90×58×91cm(左) 40×40×50cm(手前) 作家蔵
左下／ナミビアのニエンバ族のマベウは、空軍基地の近くに住み、観光客相手に木彫の土産物を作つて生活の糧にするいっぽう、飛行機やヘリコプター、トラックなどの大型オブジェを制作している。●ユリア・クラウゼ=ハーダー《ジュラヴァエナトル》2013年 ミクストメディア 51×40×104cm(下)
／《無題》2014年 麻布、綿布、バッチャワーク、アップリケ 120×125cm(左上)、140×135cm(上右) アトリエ・ゴールドシャルム蔵(3点とも)



堆く積み上げられたコピー用紙には、独国防省のコンピュータと作成本人だけが解説できる(という前提の)世界政治のための記号が。
●**ワンド・ヴィエーラ・シムミット《世界救済プロジェクト》** 1995年~ 5万枚のドローリング、椅子 可変サイズ ドローイング 各21×29.7cm ドイツ連邦国防軍軍事歴史博物館蔵



part 6

exhibition art NEWS

り多角的に観ることはできないかと考えました」

会場は、全6章で構成されている。冒頭を飾るのは、半世紀以上にわたり有名無名の人物に扮してセルフィーを撮り続けるポーランドのトマシュー・マチニスキ(1942年生れ)「112頁」。自身のアイデンティティを取り込んだ作品群を集めた第1章にふさわしい幕を開けだ。以下、各章の概要は②素材との出会い、③外界のもの(モデル)を捉える目線、④時代や文化的背景からの影響、⑤宇宙や社会の成り立ちを理解する試み、⑥時空を超えた想念——といふ流れ。図版に添えた①~⑥の数字が、章分けに対応する。

いわゆるハイ・アートとは異なり、人に見せるために創られたものではない、純粋な自己表現としての作品群は、

出品作の一部は、今展終了後、パリのポンピドゥー・センターに収蔵されることが決まった。

「作家の人生の一部としての創作物が、公的機関に収められることは喜ばしい反面、少し寂しくもある」と嘉納さんは複雑な胸中を明かす。

ラストの薄暗い一室には、整然と積み上げられた夥しい量のコピー用紙が上。71歳になるドイツ人女性ワンダ・ヴィエーラ・シムミット(1949年生れ)が10年かけて一枚一枚に描いた「悪を退治するための記号」は、約25万枚、6トンに及ぶ(内600キロ分を移送展示)。彼女は現在も、世界平和を祈りつつ、ダルーブホームの一室で耐々と書き続いているという。

施設に入所後、家族とのスナップ写真を20年にわたり愛撫し続けて出来上がった化石のようなオブジェ。「愛情の分身」という写真のもう一つの在り方が提示される。●杉浦篤《無題》 1993年~ 写真 各14×11cm 全40枚 みぬま福祉会工房蔵

のびやかで闊達なものもあれば、執念とこだわりから生まれた超細密なものもある。形態もオリジンもさまざまだが、表現という行為のダイナミズムが伝わってくる点で一貫している。「人間誰しも、人生のハードルを飛び越えなければならぬポイントがあるでしょう。今展に並んでいるのは、創作の力を借りてハードルを飛び越えた証のような作品なんですね」



part 6

「週刊新潮」の顔、 谷内六郎の世界が甦る

『谷内六郎いつか見た夢』

G
S

Around Geijutsu Shincho

昭和のお茶の間に毎週流れた、あのテレビCMを憶えているだろうか——「週刊新潮は明日発売です」というナレーションとともに、「赤とんぼ」のメロディが流れる。

画面に映し出されるのは、詩情あふれる絵。川端康成をして、昭和の夢——と言わしめた、稀代の抒情画家・谷内六郎が描いた作品である。谷内は1956年(昭和31)2月6日発売の「週刊新潮」創刊号から1981年(昭和56)に亡くなる直前まで、25年間にわたって、1335点の表紙絵を描き続けた。

今年は谷内六郎の生誕100年にあたる。谷内作品の多くを所蔵する横須賀美術館では、9月からまで見ててもつきない夢を開催。代表作である「週刊新潮」表紙絵

原画はもちろん、戦中戦後に描いた初期作品や貴重な漫画本、兄弟で切り盛りしていた「らくだ工房」での染色作品、表紙本まで、幅広い作品世界を紹介し、谷内六郎の全貌を振り返る。

展覧会にあわせ、「とんぼの本」

では、谷内六郎 昭和の想い出(2006年刊)に32ページを加えた増補改裝版「谷内六郎 いつか見た夢」を刊行。「週刊新潮」表紙絵からあらたに名作30点を厳選し、これらについて谷内自身が綴った「表紙の言葉」も全文掲載する。

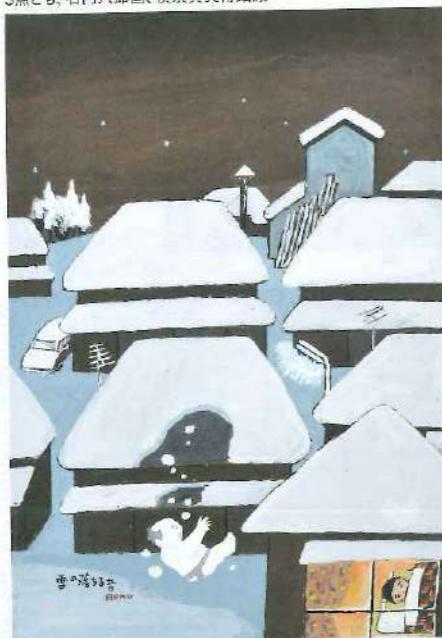
懐かしいのに、とっても斬新。愛とユーモアとやさしさに溢れる谷内六郎の世界に、展覧会と「とんぼの本」でたっぷり遊んでみてはいかが。

関連書籍案内

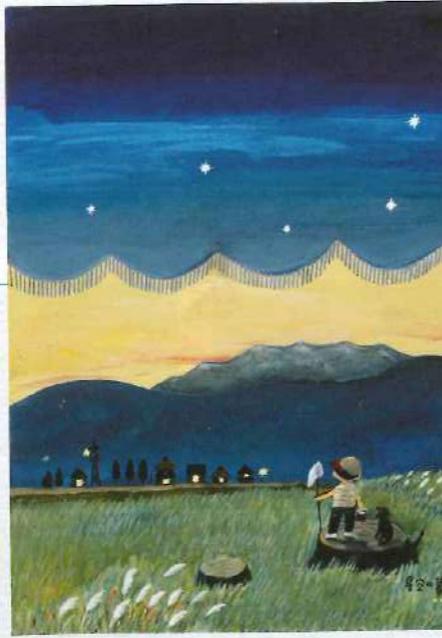
『谷内六郎 いつか見た夢』
谷内六郎 谷内達子 橋本治
芸術新潮編集部/著
定価:2200円(税込)
新潮社(とんぼの本)
8月31日発売
日本で愛されたあの懐かしい絵が甦る! 生誕100年記念、「とんぼの本」増補改裝版。「週刊新潮」表紙絵より名品73点をたっぷり紹介。

展覧会情報
生誕100年 谷内六郎展
いつまで見ててもつきない夢
9月25日~12月12日
(休館日:10月4日、11月1日、12月6日)
神奈川・横須賀美術館
<https://www.yokosuka-moa.jp>

3点とも、谷内六郎画、横須賀美術館蔵



●《雪の落ちる音》「週刊新潮」
(1970年1月24日号)表紙絵原画



●《星空の幕》「週刊新潮」
(1967年9月30日号)表紙絵原画



●《タネを吹く子》「週刊新潮」
(1960年5月23日号)表紙絵原画

「生誕100年 谷内六郎展」いつまで見ててもつきない夢を開催。代表作である「週刊新潮」表紙絵